

正 誤 表 (SR2022-88)

相対遅延差に着目した任意粒度の非整数サンプル遅延の実現

○中村 陽斗・山田 洋士 (石川高専)・亀田 卓 (広島大)

信学技報, vol. 122, no. 400, SR2022-88, pp. 24-31, Mar. 2023.

上記の研究会予稿におきまして、以下の誤りがありました。下記のように訂正申し上げます。

記載箇所	誤	正
p.28 表 1	数値に誤りがあります。	裏面のグラフが正しい結果です。
p.28 図 12 上から 2 行め	$dkizami=0.001$	$dkizami=0.01$
p.30 下から 4 行め	伝搬路が $R = 6$ の 2 波モデルの場合と $R' = 6.3$ の FD2 波モデルの場合のアイパターンを図 22 に示す。	伝搬路が $R = 3$ の 2 波モデルの場合と $R' = 3.3$ の FD2 波モデルの場合のアイパターンを図 22 に示す。
図 22(a) キャプション	$R = 6$ の 2 波モデルの場合	$R = 3$ の 2 波モデルの場合
図 22(b) キャプション	$R' = 6.3$ の 2 波モデルの場合	$R' = 3.3$ の 2 波モデルの場合
p.31 本文 下から 5 行め	FD2 波モデルにおいて、遅延波の大きさが同等の 2 波モデルよりもアイパターンの開口率が低下する例をシミュレーションにより示した。	非因果成分が存在する状態で、アイパターンの開口率により符号間干渉の程度を定量的に評価できる可能性があることをシミュレーションにより示した。

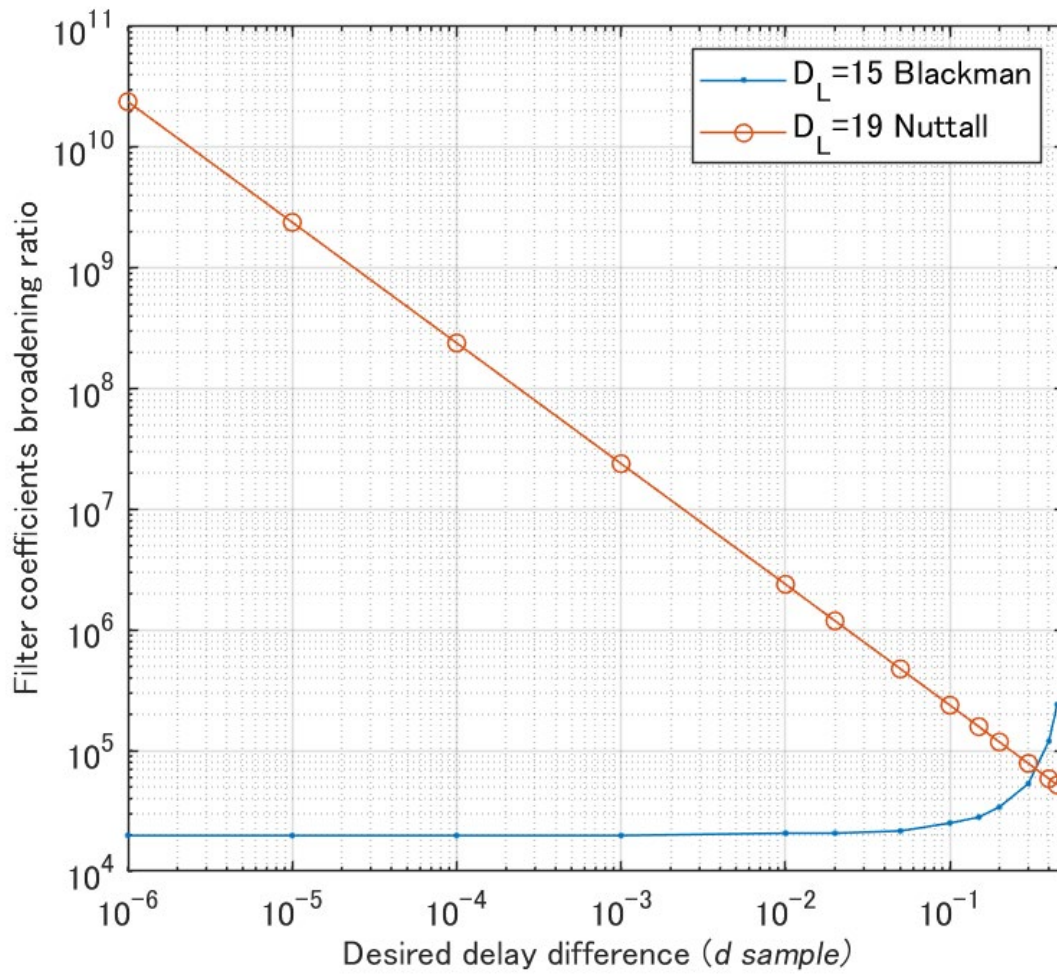


表 1 を修正してグラフ化 遅延差実現に用いるフィルタでの係数値の広がり比較

以上

担当者
 石川高専 電子情報工学科
 山田 洋士